

「関西ジャーナリズム」の歴史社会学的研究——『大阪時事新報』を中心に

松尾理也

(論文内容の要旨)

関西におけるメディアの現場では、「関西ジャーナリズム」という言葉が反権力・反権威、市民あるいは庶民感覚、旺盛な批判精神といった報道の特性を指す概念として今日も用いられている。そうした特性はジャーナリズム一般にあてはまる規範でもあるため、関西ジャーナリズムこそが「日本のジャーナリズムの原点」という主張が込められていることもめずらしくない。実際、現在の全国紙『朝日新聞』『毎日新聞』『産経新聞』の発祥の地はいずれも大阪である。そのため、「大阪」あるいは「関西」を起点とするジャーナリズムの歴史は、その輝かしい発展の歴史として描かれやすい。

こうした「勝ち組」メディアではなく、本論文では『大阪時事新報』(1905年～1949年)という「負け組」メディアの視点から「関西ジャーナリズム」の形成史を明らかにする。同紙は福澤諭吉が1882年に創刊した『時事新報』の「分身同体」であり、東京に進出した『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』とは逆に、東京から大阪に進出した「高級新聞」である。これまでほとんど研究されていない『大阪時事新報』の歴史をたどることで、「発展史観」のバイアスを相対化しつつ、「関西ジャーナリズム」という概念の成立プロセスを明らかにすることが本論文の目的である。

序章「実業の都と福澤精神」では、まず関西という地域概念と大阪における新聞史を概観した上で、福澤諭吉の思想、いわゆる福澤精神を体現した高級紙『時事新報』に比べて、戦前の大阪紙は商業主義の大衆紙として批判対象であったことを指摘する。『大阪時事新報』は、東京の高級紙と同じ編集方針で出発しながらも、大阪紙との競争の中で「特殊の発達」を遂げていった。その変化の相に「関西ジャーナリズム」のエッセンスを探るというアプローチが本論文の方法論である。

第1章「大関西圏構築の夢—帝国を疾駆する「汽車博」」では、西日本全域での読者層拡大キャンペーンとして創刊翌年の1906年から『大阪時事』が始めたイベントを分析する。九州を越えて大陸まで射程に入れる広大な空間への展開は、現実的には困難だったが、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』に伍するためには回避できない挑戦だった。こうした「空間バイアス」(ハロルド・イニス)の追求は『大阪時事新報』の自己認識を不安定化させ、東京紙とは異なる「特殊の発達」が始まることになった。

第2章「夕刊発行と時間軸の拡大—化け込み記者・下山京子」では、1908年から『大阪時事新報』の三面記事に登場する女性記者の潜入ルポを検討する。夕刊発行は東京で大成功を収めた『報知新聞』に倣った試みだが、この紙面増加によって大阪独自取材のニュース需要が高まった。下山の記事からは市井の哀歓や日常の機微を切り取る「新しいフレーム」が浮かび上がる。それは政治の中心から離れているが、激しい部数競争にさらされた大阪の特殊な条件が生み出した「ニュースをつくる手法」だった。

第3章「リベラルな場としての大阪社会部—主義者・難波英夫」では、前章で論じた「新しいフレーム」がイデオロギーの時代である大正期に「大阪社会部」の特徴として強化されていく過程に着目する。その典型例として、水平社設立にかかわった『大阪時事新報』社会部長・難波英夫を取り上げる。東京のように政治権力との真正面からの衝突が少ない一方、地方のように人間関係で動

きが取れないこともない大都市・大阪であればこそ、難波のような理想主義を掲げる社会派記者の活動場所も生まれた。ここに現在にいたるリベラルな大阪社会部の伝統を見出すこともできる。

第4章「距離を埋めるテクノロジー—東京電話」では、東京に「分身同体」をもつ『大阪時事新報』においては特別な意味をもったコミュニケーション・テクノロジーから紙面の変化を考察する。東京から離れた空間的条件を克服するため、いちやく電信、電話の利用が行われ、その「意図せざる結果」として記事内容も東京紙とは異なるものになっていった。さらに文字を扱う電報から、声を伝える電話への変化に伴って、「声の文化」（ウォルター・オング）としての「関西ジャーナリズム」を形成していった。

第5章「福澤精神の射程—主筆・土屋大夢がみた大衆」では、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』との部数拡大競争で敗北が確定した1920年代後半を扱う。1924年主筆に就任した土屋元作は福澤諭吉の高弟であり、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』をわたりあるいた政論家である。すでに主筆の論説に頼るパーソナル・ジャーナリズムから報道中心の組織ジャーナリズムの時代に移っていたが、没落期の名門紙は「福澤精神」へ回帰を強めていった。土屋社説は大衆社会における論説新聞の限界を示しており、1930年『大阪時事新報』の経営が東京本紙から切り離されると同時に土屋も辞職している。

第6章「二流紙、の日本主義—「メディアと戦争」異聞」では、1930年神戸新聞社に買収され、『神戸新聞』『京都日日新聞』とともに「三都合同新聞トラスト」の傘下に入った『大阪時事新報』における論調の過激化を考察する。「二流紙」となった『大阪時事新報』は生き残りをかけて急速に日本主義化していった。報道では全国紙に立ち向かえない二流紙は、政論にすがること、権威を批判する旧来のジャーナリズムの理念に立ち戻った。『大阪時事新報』の発禁処分数の増加はそれを裏付けている。とはいえ、時代状況は左翼的な批判を許容しないため、「否定の論理」は必然的に右に傾いた。これが1930年代ジャーナリズムにおける日本主義化の本質である。この否定形の論理は、東京に対する関西の心情、いわゆる反権力・批判精神として戦後にも継承されることになった。

第7章「「地方」の動員—新聞統合と『大阪新聞』の誕生」では、内閣情報部が推進した新聞統合を扱う。戦時体制下で地方紙は一県一紙に統合され、『大阪時事新報』も前田久吉の『大阪新聞』に統合された。『産経新聞』の創業者でもある前田は、『大阪時事新報』の合併をめぐる『読売新聞』の正力松太郎と激しい争奪戦を展開した。最終的に当局は中央紙への吸収ではなく、地方紙『大阪新聞』の強化を選んだ。

第8章「よみがえる『大阪時事』—戦後の復刊」では、いったん消滅した『大阪時事新報』が、東京の『時事新報』とともに戦後復刊した経緯を扱う。1945年10月に新聞用紙割当委員会委員となった前田久吉は、『時事新報』の高級紙ブランドを用紙割当の確保に利用した。また、『大阪時事新報』における府県を越えた広域性も、『産経新聞』の全国紙化をめざす前田にとって魅力的であった。『大阪時事新報』は1949年に『大阪新聞』と再統合され、1955年に『時事新報』も『産経新聞』に吸収された。『大阪新聞』も2002年には『産経新聞』大阪本社版夕刊に紙面統合されてい

る。

「おわりに—規範論を越えて」では、以上の展開を踏まえて「関西ジャーナリズム」の特性を歴史社会的に整理している。現在の全国紙『朝日新聞』『毎日新聞』、いわゆる「勝ち組」の視点からのバイアスを外し、『大阪時事新報』という第三極から見た場合、関西ジャーナリズムの本質は「大文字の政治」に対する「小文字の政治」の優位性と評価することができる。それは庶民、日常へのまなざしであり、反中央、反権威の「否定形の論理」と呼んでもよい。それは単に「中央からのほどよい距離」から生まれたわけではなく、大阪という大都市の盛衰と「メディアの量的拡大」を背景に、激しい部数競争の中で形成されたジャーナリズムの風土に根ざしている。むしろ、それは無条件に肯定できるものではない。「否定形の論理」も「小文字の政治」への着目と一体になってこそ、その特性を発揮する。そうした意味でも、関西ジャーナリズムは歴史的経験の上に成立した、独特なメディアのあり方に規定されている。以上の事実関係を新聞紙と周辺資料から実証的に明らかにしている。